

# 読みたい本と出会う方法

2024/11/13 河路裕司

## QUESTION 1 「普段の本の探し方、買い方」

- ✓ まったく面白くないですが、基本3パターン
- ✓ 一番楽しいのは、大きな本屋をぶらついて探す（丸善や三省堂など） …… **出会いと運命を感じる。ピピッと来ますよねー**
- ✓ 月1くらいで図書館をぶらつく。これも出会いがあって楽しい
- ✓ 3番目はお気に入りの作家の新刊情報をチェックして

## QUESTION 2 「買った後の読み方」

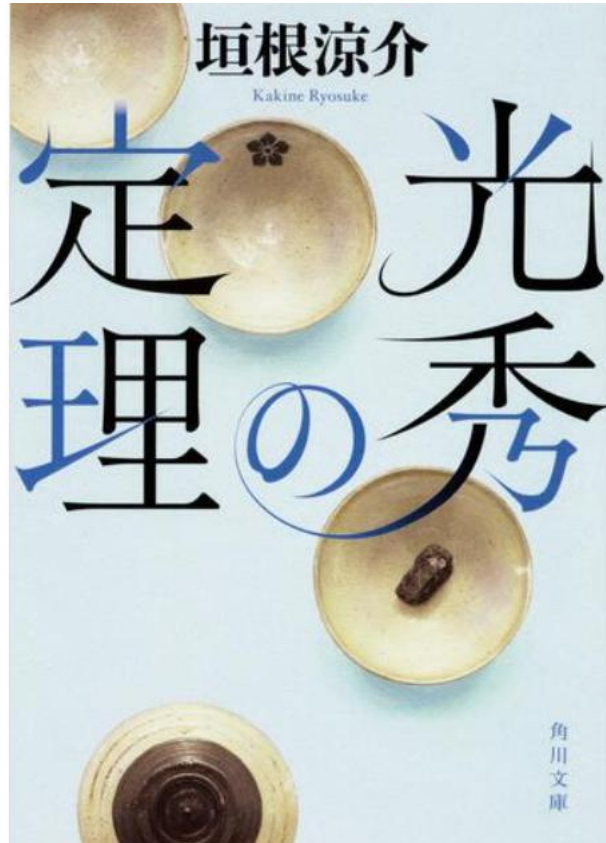
- ✓ だいたい何冊か読みたい本が溜まってるから、その中から、何も考えずに急に手に取って読み始める
- ✓ 小説や漫画は、ほとんどの場合、一気に読む。ビジネス本は、一気に読みたくなるのはたまにしかなくて、ほとんどは何日かけて読む
- ✓ あと、小説や漫画は、お酒を飲みながら読むことが多い。特に漫画は基本的に飲みながら読むことが多い。居酒屋、BAR、宅飲み……

## QUESTION 3 「読後のアクション」

- ✓ 読んだ本についてのアクションは基本的に何もない…このオンライン読書会が、初めて、かつ唯一のアクションです！
- ✓ ただ、読んだ本をトリガーに、まったく違う本へ繋がっていくことが結構多い。次頁で、その「繋がり方」の例を挙げます

# 垣根涼介 「光秀の定理」

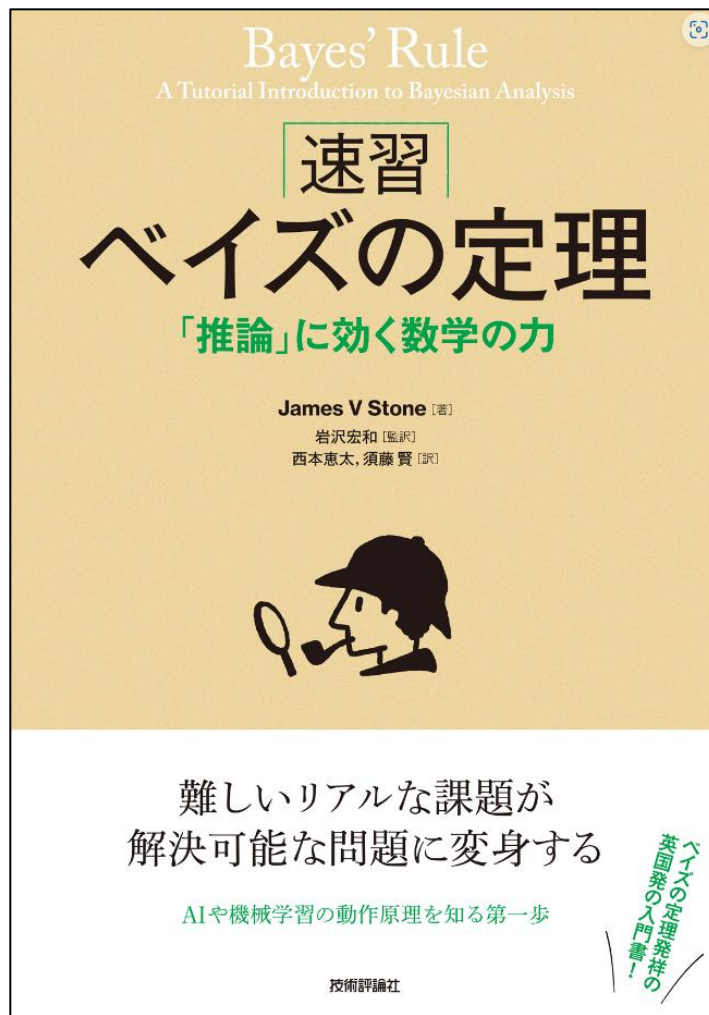
## 異端の統計学 その名は「ベイズの定理」



- ✓ 私のお気に入りの作家の一人 垣根涼介さん
- ✓ ちょうど昨年の11月の読書会で「光秀の定理」という作品を紹介
- ✓ この中で「四つの椀」の博打の話が、メインストーリーと絡み合っ出てくる。
- ✓ 最初にまず、胴元が客に見えないように、伏せられた四つの椀の一つに石ころを入れる
- ✓ 客は、四つのうちのどの椀に石ころが入っているかを当てる博打
- ✓ 手掛かりはまったくないので、まずは適当に選んでもらう
- ✓ 客が選んだら、次に、胴元はそれ以外の3つの中から、空の2つを選んで開けて見せる
- ✓ この時点で伏せられたままの椀は2つになっている。ここで胴元は客にこう声をかける
- ✓ 「最初に選んだ椀のままでいくか、それとももう一つの椀に変えるか好きな方を選べ」
- ✓ 客がどうするかを表明したら、伏せられた2つの椀を同時に開ける
- ✓ 客が決めた方に石ころが入っていれば客の勝ち。入っていなければ胴元の勝ち
- ✓ この賭けを続けていくと、次第に**必ず胴元が勝っていく**
- ✓ この不思議な現象に使われるのが「ベイズの定理」

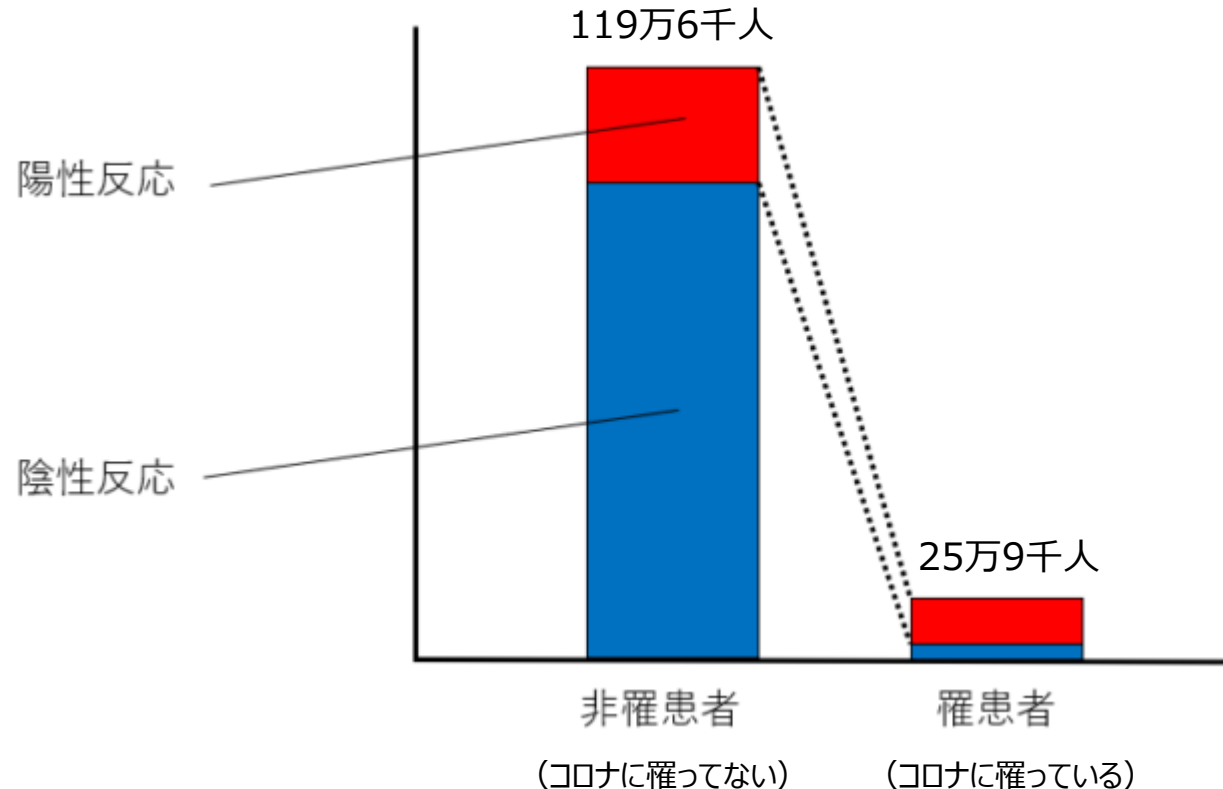
# ベイズの定理

## 異端の統計学 その名は「ベイズ」



# ベイズの定理

## コロナ禍でなぜ全員検査がダメなのか？



- ✓ 新型コロナが蔓延し始めたころ、テレビではコメンテーターが「政府はPCR検査を全員に拡大すべきだ」と主張していた
- ✓ もし全員検査などをしていたら、確実にパニックがおきていた
- ✓ ピーク時のコロナ感染者の数を37万人とするとこれは日本人全体の0.3%になる
- ✓ このタイミングで全員検査すると、感染者で陽性となるのは25万9千人、感染していないのに陽性とされる人は119万6千人
- ✓ 要するに陽性となった人の約5人に4人以上が本当は感染していない
- ✓ もしこれを行っていたら、確実に医療崩壊して、救われない真の感染者が出たことは明らか
- ✓ 重要なのは当時、多くの知識人と呼ばれる人たちや政治家の中で、こうしたことが感覚的にわかってない人が多くいたこと
- ✓ 疫学の専門家はもちろん、ベイズ統計を多少とも知っていた人は「全員検査などとんでもない」と思っていた
- ✓ これは頭の良い悪いではなく、基礎的な科学的知識の有無だけ

# 科学を継ぐもの

## 専門家のみが持つ、エキスパート・ジャッジメントという暗黙知の存在



- ✓ マイケル・ポラニーは専門知の習得について、こう述べている
- ✓ 科学の専門知は、先輩科学者に弟子入りし、長期にわたる訓練を受けることによつてのみ継承できる
- ✓ 専門家養成には言語化されたマニュアルに還元できないものが必ず含まれる
- ✓ これを「エキスパート・ジャッジメント」と呼ぶ
- ✓ この専門知は、この**専門知をすでに持っている人の周りで時間を過ごすこと**によつてのみ習得される
  
- ✓ しかし、現在、一つの問題が顕在化している
- ✓ このエキスパート・ジャッジメントへの不信の亢進という問題
- ✓ たとえばエアコンが壊れたとか、家の修繕ということなら、その種の専門家の判断に任せるのに抵抗はない
- ✓ しかし、より重大なこと、例えば原子力発電所の安全性をエキスパート・ジャッジメントに任すことができるか？

# 専門家に任す？ それとも国民投票でもする？

## すべてエキスパート・ジャッジメントに委ねられるか？



出典：トランス・サイエンスの時代 小林傳司 著(NTT出版)  
<https://www.nttpub.co.jp/search/books/detail/100001780>

- ✓ 2003年の裁判で「原子炉事故は当然想定されるべきだ」と批判を受けた原子力安全委員会はこちら反論した
- ✓ 「仮定に仮定を重ねていけば事故を**仮想**することは可能ではある」
- ✓ しかし「原子炉の施設の安全確保は、個々の事象の発生の可能性に応じて決められるべき」
- ✓ 「どこまで仮定するかは高度な専門的知識をもとに判断され、想定には自ずと上限がある」
- ✓ 可能性をどこまで想定するかの判断は**エキスパート・ジャッジメントに委ねるべき**であるという主張
- ✓ しかしエキスパート・ジャッジメントの問題は、それが定量化できるものではなく一種の「暗黙知」であることにある



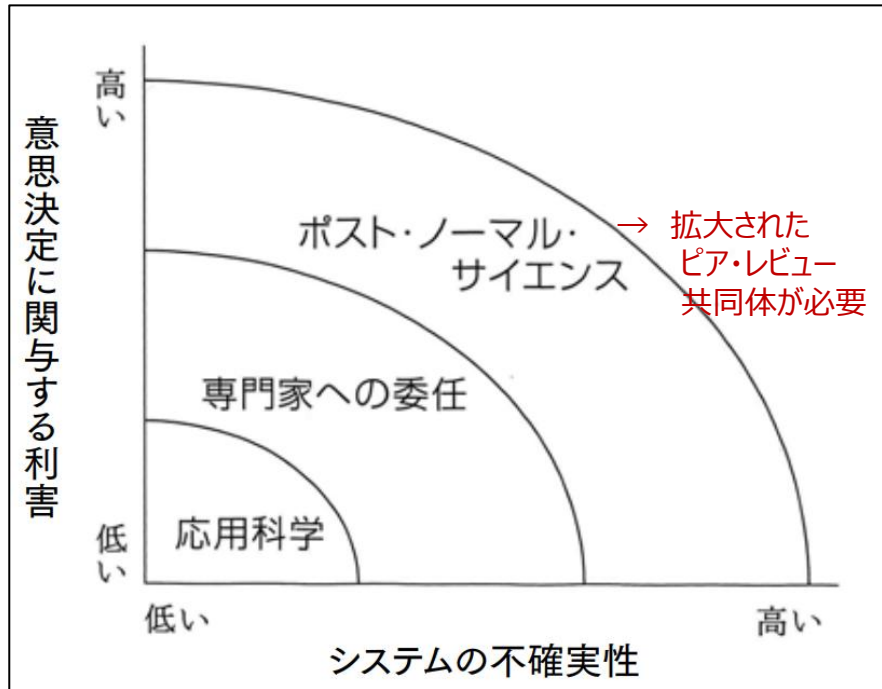
出典：<https://mindfulness-project.jp/psychologicalsafety/safety3.html>

**どんな専門知もエキスパートジャッジメントが必要である、ということには疑いの余地はない。**

**しかし、福島事故を経験した後で「エキスパートジャッジメントにすべて委ねるべき」と主張することは可能なのか？**

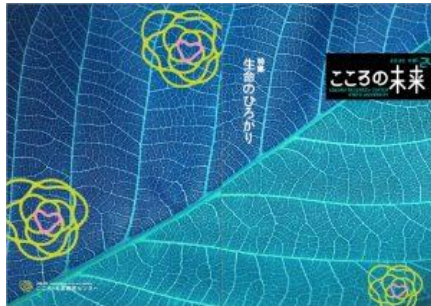
# ポスト・ノーマル・サイエンス

## 多様性を備えた専門たちの委員会



出典：「ポスト・ノーマル・サイエンス（ラベッツ1999年より）  
トランス・サイエンスをめぐる展望

京都大学学術広報誌「こころの未来」第24号(2020/12/17)  
<http://kokoro.kyoto-u.ac.jp/wp-content/uploads/2020/12/aa4e4ec796d0a462d92d560d1ed1885f.pdf>



- ✓ ラベッツは「ポスト・ノーマル・サイエンス」で科学技術研究のレベルタイプを2つの軸で分類
- ✓ 不確実性・利害ともに低い領域は「応用科学」として定義されていて、すでに科学的原理が把握され、社会に適用する営みが行われている分野
- ✓ 程度が少し高い領域が「専門家への委任」の領域。この領域における判断が、**エキスパート・ジャッジメントに任される分野**である
- ✓ さらにすべての程度が非常に高くなる領域が「**ポスト・ノーマル・サイエンス**」の領域
- ✓ これは「システムが巨大化・複雑化し、科学・知識が不十分な領域」ということ
- ✓ この領域は「エキスパート・ジャッジメントのみ」に任せて推進するのは危険だ、というのがラベッツの主張
- ✓ この領域での判断には**十分な多様性を備えた専門家たちによる委員会**が必要とされる
- ✓ これをラベッツは「**拡大されたピア・レビュー共同体**」という言葉で表現
- ✓ 企業でこれを実現するには、各職種ごとの専門委員（＝その職種のトップの社員）による委員会を構成する必要がある